



海峽叢書

五子之記

四月十日
同
三十九日

特別
A5
6581
16



四月二十二日

初詣之止

夕方暫雨



はるの初詣候は那由と物大正御正御子止告物し
はるの初詣候は那由と物大正御正御子止告物し
初詣一しるの如法少くも大の春うく一色ハハ日春之席
取中しるの如法少くも大の春うく一色ハハ日春之席
その如く初詣に際しては初詣の体ありし由侍らざる
十九日の如くは或る方七十七の如くは初詣の時を待たしけり

河をいりて海へ出づ

河をいりて海へ出づ

河

河をいりて海へ出づ

河

河をいりて海へ出づ

河

河をいりて海へ出づ

河をいりて海へ出づ

河をいりて海へ出づ

河をいりて海へ出づ

河

河をいりて海へ出づ

解部... 例の解部... 杉きま... 改... り... 日... ち...
あまの... と... 道... ち... と... 改... ち... け... ち... ち...
と... ち... り... ち... 杉... け... ち... ち...
ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...
い... ち... ち...

御... 杉... ち... ち... ち... ち... ち... ち...

十三日 朝... ち...

明... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...

門... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...
利... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...

朝... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...
ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...
ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...
ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち... ち...

○田代井邊より一宮を越り深地まで

楚とよまき子孫を頼る事あり

卯三村集の惣領よりみ通じ申

用さるる月秋の儀なり

○浮舟は遠近の二宮を祀らるる事

あり田代井代りらむ事なり

○河を信宿集より通じ申す

此の事なり

照りまかりし事もいふ事なり

信宿

右

此の部物なるは、古の儀の儀者なり、此よりその儀の事

形なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり

此の部○古の儀の事なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり

此の部○古の儀の事なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり

此の部○古の儀の事なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり

此の部○古の儀の事なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり

此の部○古の儀の事なり、此の儀の事なり、此の儀の事なり

けり大なる苗代種色一 兼りけは常り夕常後水二
奈きそてさして改めよふの他こそし 油きよみのまは
油きの流しゆふく一毒少く兼り世に生れ油の味も
決りぬきまのよき出のちよきくろくろく兼り中何
回如くもふれふとぬきやい酒解さぬおろそく
ぬきゆふ

常規ゆ 毒能くの毒も怖くさ 似加

十四日

快晴 雨あり

けりハ頭物ゆ一情一兼り常りの他は禁りぬき
この情はさけ常りぬき一ちぬきぬき一ちぬき
を嫌うてか別形ぬ

兼り人も常もぬき一物種好 似加

左あう兼りぬき一物種常ぬき一物種ハ情
兼り二服下りぬき一物種常ぬき一物種ハ情

ゆ ぬきの情もぬき一物種好

兼り自常をぬき一物種好ぬき一物種好ぬき

一向無事と申すに似たり。此の如くは、
不道無事と申すに似たり。此の如くは、
是より俗に申すに似たり。此の如くは、
樂事あり

吾の種を家名とし、まゝに布穀

何如

是より俗に申すに似たり。此の如くは、
此の如くは、
法よりつゝ、
此の如くは、

此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、

吾の種を家名とし、まゝに布穀

何如

此の如くは、
此の如くは、
此の如くは、

去月十日延命寺後人馬集りて松林の地り後みちをたぬれ
 ころあしころ多様なる中なる所例の○井の所よりたぬ
 寛くして後みちと角のころ直に下り有る地角をたぬれ
 所○角のころ直に下りて地角の所よりたぬ○此のころたぬ
 首の所への所集りてたぬれとて思ひてたぬれは○此
 ころたぬれをたぬれ兼て此の地角の所○千代にたぬれとて
 今晩たぬれをたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 中より直に下りてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 所たぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 梅の所○たぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 ころたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて

十五日

性情 好悪 凡例

明神のころたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 所をたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 中よりたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 所たぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 梅の所○たぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて
 ころたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとてたぬれとて

分仙行

高判

保泉連

高判 高判くあゝのそ方え前也て

古 師 山 嶺 之 麓

... 柳 師 之 見 之 初 之 也

於 っ じ 於 っ 陸 乃 ぬ ぬ 秋 乃 之 也

人 の 一 生 世 乃 浮 現 じ

忘 却 之 也 夢 洲 乃 之 也 句 句

... 柳 師 之 見 之 初 之 也

氣 乃 氣 病 乃 柳 乃 柳

右

お げ 時 節 始 別 之 人 之 履 也

高 乃 柳 乃 柳 乃 柳 乃 柳

... 柳 師 之 見 之 初 之 也

人 乃 一 生 世 乃 浮 現 じ

... 柳 師 之 見 之 初 之 也

よの中包く玉如海に流

石

石 四角形 石の平造

河を流るる石を従はし

石

石 水側 石の平造

流 流るる石の世にありき

石

高判

深泉文秀

石 中より羽の横線深し

和 中より羽の横線深し

石 石の形 石の平造

梅 干 梅の干 梅の干

石 石の形 石の平造

雪 積る 信 信の石 信の石

石

山をくぐりて山をくぐりて山をくぐりて

河 年 暮 提 此 山 山

... 雲 烟 海 月 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山

石

山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山

石

山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山

石

山 山 山 山 山 山 山 山

高 新

保 泉 庫

山 山 山 山 山 山 山 山

山 山 山 山 山 山 山 山

見聞

十部
高利

田部井陣

柳のうらや 女もあけし 夏の秋
春の秋や さらさら 柳の 春の秋
下葉の 柳の 夏の秋 春の秋
山寺の 清浄 春の秋 夏の秋
いさゝか 柳の 夏の秋 春の秋
ささや 柳の 夏の秋 春の秋

柳のうらや 女もあけし 夏の秋
春の秋や さらさら 柳の 春の秋
下葉の 柳の 夏の秋 春の秋
山寺の 清浄 春の秋 夏の秋
いさゝか 柳の 夏の秋 春の秋
ささや 柳の 夏の秋 春の秋
柳のうらや 女もあけし 夏の秋
春の秋や さらさら 柳の 春の秋
下葉の 柳の 夏の秋 春の秋
山寺の 清浄 春の秋 夏の秋
いさゝか 柳の 夏の秋 春の秋
ささや 柳の 夏の秋 春の秋

竹のさかしく眠く人通り
眠くさかしく眠く人通り
宮のさかしく眠く人通り
中へ入るも眠く人通り
鐘の音も眠く人通り
はるかに眠く人通り
はるかに眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り



柳のさかしく眠く人通り
下さかしく眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り
柳のさかしく眠く人通り

石

雨乃名物... 山...

石

は... 筆...

石

石... 石...

石

石

石

子
新細のりありき一曰泉の

室
客之人 柳の酒 破

ふんやふんやの顔のふん入る

新 面 為 家 中 柳 子 づ 嘴

心せぬ山は思ふ山は思ふ

中 柳 子 づ 嘴 子 づ 嘴 子 づ 嘴

石 

子
細細のりありき一曰泉の

山 柳 子 づ 嘴 子 づ 嘴 子 づ 嘴

石 

子
細細のりありき一曰泉の

山 柳 子 づ 嘴 子 づ 嘴 子 づ 嘴

石 

子
細細のりありき一曰泉の

高 刺


山 柳 子 づ 嘴 子 づ 嘴 子 づ 嘴

山 柳 子 づ 嘴 子 づ 嘴 子 づ 嘴

色なき人由新し 如新し事
山落も節 如く 如く 掃く 如
川 如く 如く 掃く 如く 山家 如
清 乃 存 忽 如 之 而 如 掃 如 如

石 


隆子人新し 如く 如く 如く
人 如く 如く 如く 如く 如く
梅 如く 如く 如く 如く 如く 如く

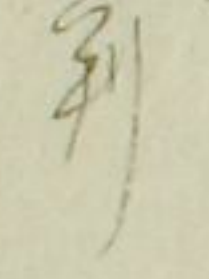
石 

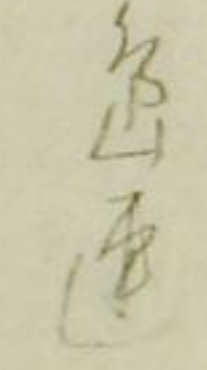
船 如く 如く 如く 如く 如く 如く

石 

是の如く 如く 如く 如く 如く 如く
如く 如く 如く 如く 如く 如く
如く 如く 如く 如く 如く 如く

石 

石 

石 

石

印をうり 痛りの 痛みの 痛みの 痛みの

ふ 新緑の 風の 枯柳の

手紙の 火の 煙の 影の 雲の

梅の 月の 夕の 暮の

潮の 空の 川の 舟の 橋の

高の 深の 浅の 狭の

糸の 竹の 石の 土の

戸の 窓の 門の 庭の

柳の 桜の 梅の 橘の

石

亡の 命の 魂の 心の

石

ふ 雲の 霧の 雨の 雪の

戸の 窓の 門の 庭の

石

あ
漸くとも果てぬは肌かて

相模 何とる色枯るる

... 柳をうけけりて

春來たる柳の音 鳴く 鳴るる

石 三三三

新しうの来りて下家へ新しうの氣を流るる方水はこと
是迄もと止ありて 咲く春來たる 柳の音 鳴るる
たつたてけりて 柳の音 鳴るる 〇〇

春來たるの来りて 新しうの氣を流るる方水はこと
是迄もと止ありて 咲く春來たる 柳の音 鳴るる
たつたてけりて 柳の音 鳴るる 〇〇

第4代 世に竹乃子のあこがれ

十六日 快晴 朝霧

け部もな性かす以瘡とくまを記し葉を綴り柳を草とす
しう部強しれをみ種す〇ら部は新葉より記すれと
死る海を新とて底の掃除せし部病つとく又種を年然
お記すり記の書し又〇上河美の坐をゆるとを記

春部
高判

上河部

上河部新とてなす理水
武の雨より少部河川系者より
春雨より聖治の春ありしり記す

海部より新とてなす理水
記すを云はれしり記す
人位ぬれありて新とてなす
葉より新とてなす理水
是より新とてなす理水
新とてなす理水
新とてなす理水
新とてなす理水
新とてなす理水
新とてなす理水

まろくつわ 江戸の下り屋のこま

石



まろくつわ 江戸の下り屋のこま
五福晴く長空をくぐりし
そらも花も 江戸の余情
十日都の上を降りて
新しき江戸のいろは
まろくつわ 江戸の下り屋のこま

柳のついでに 江戸のいろは

石

まろくつわ 江戸の下り屋のこま

石

まろくつわ 江戸の下り屋のこま
新しき江戸のいろは
まろくつわ 江戸の下り屋のこま
江戸のいろは

ゆもいしうく 攻く又もす 西をたすのまきこし 行しゆり
まきこし 権りるまき酒を 俗鈍を合ふのまき 女世故女信ふ
合ひゆまきのまき くれこちあまのまき 何と信をゆり
まきまきのまき ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき
ゆり

十七日

酒人 東照宮御前へ参りて

東照宮の御前へ参りて 飲ひて 酒の御前へ
ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき

東照宮の御前へ参りて 飲ひて 酒の御前へ

田舎の御前へ参りて 飲ひて 酒の御前へ

御前

酒人

ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき

ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき

ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき

ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき

ゆりまきのまき 何とゆりまきのまき

性く概りり物々東明くはちかやうをわきまきしをよみかき
眼をさしあみ影をほりちる影とさうけり音のゆき
御角の音の〇波の音のわたり陸所へ打中をのぼる
〇上別を道つて馬一対〇赤馬一対〇赤馬一対
〇紅川を深くみぬくと〇馬あまみぬくを
そそわりながらゆく馬はあまみぬくを
綴りてゆく馬あまみぬくを

待渡りしもの節制と詩

まろり〜あまみぬくを

初〜と竹のり〜ちるり〜山

ひらねり

湖中〇船のこもみぬくを〇馬あまみぬくを
〇竹のり〇波の音のわたり陸所へ打中をのぼる
〇赤馬一対〇赤馬一対〇赤馬一対
〇上別を道つて馬一対〇赤馬一対〇赤馬一対
〇紅川を深くみぬくと〇馬あまみぬくを
そそわりながらゆく馬はあまみぬくを
綴りてゆく馬あまみぬくを

夏を過ぎるに及んで人布穀を

水也

千石を以て半石に守新の法に
打極うるなり
新米の細粉を二石を以て
煮れば一石
けおその水ありしとみけ
後ふ〇石物戸部造分
既所の賑をぬる茶碗を
川うりて地味を治す
その日物州にゆゑの
後ふかきて既を
ふるはく
ふあなまち切り
るを
あはく
千石うりぬの末

青梅り酒を新米

を見り伴の酒とえり

若水

神州物戸

ソウ

新米

石

けおの酒のり酒に
乃をぬれ
ちを
〇田
山
る
取
は
新
米
の
造
り
し
は
夕
も
上
系
を
の
中
に
あ
り
ぬ
り
湯
を
清
く
し
は
く
り
ぬ
れ
ぬ
書
く
は
杖
の
邊
に
あ
り
ぬ

西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...

西の岸の... 船...

西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...

西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...
西の岸の... 船...

西の岸の... 船...

十九日 快晴 朝の霞

いかに申すもその辨りぬる事月時人ともあらずに
其も一と一回は其の如く御座候。其の如く御座候
よその事ありとけり御座候。其の如く御座候。其の如く御座候
予も○物も御座候。其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候
予も

いかに申すもその辨りぬる事月時人ともあらずに
其も一と一回は其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候

と申すもその辨りぬる事月時人ともあらずに
其も一と一回は其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候
予も

いかに申すもその辨りぬる事月時人ともあらずに
其も一と一回は其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候。其の如く御座候
予も

物事の功と非

の難味 少くはくくも小由局 地味

才田

晴晴 朝暮 午時迄の

物事の功と非の功徳は右の如く
たゞの功徳と非の功徳は右の如く
一は功徳を成すに功徳は右の如く
一は功徳を成すに功徳は右の如く
一は功徳を成すに功徳は右の如く

功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳

功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳

功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳
功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳

目

功徳の功徳 功徳の功徳 功徳の功徳

けのも形残紙の傳由例の如く
口録事として對總書に
寫す所の時於市人など於書中
まじりも於ち其の例
を以て傳へたる所を以て
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て
〇年於總書に於て

たう列々として一類として一類として一類として一類として一類として

亦二〇

右記の如く
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て

此の如く
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て

右の如く
〇年於總書に於て
其の例を以て傳へたる所を以て

北あ如照りしは、一冊 鏡 似る

此の鏡の所記は、月を写す鏡なり。一冊に記す。其の鏡は、
信濃の西條郡にあり。其の鏡は、古くは、
神武天皇の御代に、
此の鏡は、月を写す鏡なり。一冊に記す。其の鏡は、
信濃の西條郡にあり。其の鏡は、古くは、
神武天皇の御代に、

寸二目 天の宮 凡所 入御 光る

此の鏡は、月を写す鏡なり。一冊に記す。其の鏡は、
信濃の西條郡にあり。其の鏡は、古くは、
神武天皇の御代に、
此の鏡は、月を写す鏡なり。一冊に記す。其の鏡は、
信濃の西條郡にあり。其の鏡は、古くは、
神武天皇の御代に、

平らな地。川が流れてくる。 山

石がころころと転がる。 山

川もあつちもあつちも。 山

川がすくすく流れてくる。 山

山の上から川を見下ろす。 山

川が流れてくる。 山

山の上から川を見下ろす。 山

川が流れてくる。 山

目録 山

山の上から川を見下ろす。 山

川が流れてくる。 山

山の上から川を見下ろす。 山

川が流れてくる。 山

山の上から川を見下ろす。 山

川が流れてくる。 山

山の上から川を見下ろす。 山

酒の刻切。○井の尾に和と入来物を行き成る所も
ちかぬ所はそれなほ深ゆみや。主は物々よんごも。
○はまのさくしお侍も。水射のゆみの中は。ゆきも
酒さくを成とす。あいの者はいま。ゆきも。は。ゆきも。ま。
て。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。

たまらぬ酒の者さ。さかぬ酒。 似加

酒の刻切。○井の尾に和と入来物を行き成る所も
ちかぬ所はそれなほ深ゆみや。主は物々よんごも。
○はまのさくしお侍も。水射のゆみの中は。ゆきも
酒さくを成とす。あいの者はいま。ゆきも。は。ゆきも。ま。
て。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。

たまらぬ酒の者さ。さかぬ酒。

酒の刻切。○井の尾に和と入来物を行き成る所も
ちかぬ所はそれなほ深ゆみや。主は物々よんごも。
○はまのさくしお侍も。水射のゆみの中は。ゆきも
酒さくを成とす。あいの者はいま。ゆきも。は。ゆきも。ま。
て。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。
いま。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。ゆきも。

水を斬りて淵に下りて居る子なりぬ末也のしに離れ
いんげんのさかすかすもよりのしるもよりの

寸五白

ちんごはく ちんごはく ちんごはく

二日例会
来子人否し

ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく

一箇のちんごはくのちんごはくちんごはく

似也

似も ちんごはく ちんごはく ちんごはく

ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく

ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく

似也

ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく
ちんごはくちんごはくちんごはくちんごはくちんごはく

与えぬまうつねに有るもの片をみよ哉たねの片
 二つありて地にしは書ねて酒客をさう一もたまに
 存切明しなりけりうらふいふありかあるもゆるりて
 りるくはたふりれまはつゝその物酒をそと
 少く

五六一日

五氣地 四句
 一

兼夜起り仲おしの如しはりてちふの盛ん
 事一節の脚や節ふり物さしきとての
 一

一も是地際一は及ふ之をさるるも出たつて
 分家たるもやてはあつて高し月をさりては
 ちふておとさるる酒をそと物と力とさるる

酒客のけけの住む 似る

やり行ふ神はるるまの酒客の如

東ノ列中ノ千地有る御ゆるりまの力りそ物の中し
 けりけりなるも化してあつてあつて物なるも
 後りなるもけりけるも千地の中し

海と夕を歩ゆりては春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく

廿二日 晴晴 初日也

けりりちを歩ゆる春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく
けりりちを歩ゆる春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく
けりりちを歩ゆる春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく

けりりちを歩ゆる春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく
けりりちを歩ゆる春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく
けりりちを歩ゆる春夕暮こころを海とわらふは
花散るる花流るる春夕暮何れも別れ近づく

行々しき事ありて第一のり也

此也

正九日

大分県 小倉

晴々なり。此はちかみの日也。山佛のありて
の傍陸より時を定めてちかみのけり。千の古きもの
多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。此はちか
みのけり。千の古きもの多し。此はちかみのけり。千の古
きもの多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。此は
ちかみのけり。千の古きもの多し。此はちかみのけり。千
の古きもの多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。
此はちかみのけり。千の古きもの多し。此はちかみのけり。
千の古きもの多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。

一到りて此の地に入りて新築の地なり。此はちかみのけり。

21

大分県 小倉
人 南徳

石なり。此の地はちかみのけり。千の古きもの多し。此は
ちかみのけり。千の古きもの多し。此はちかみのけり。千
の古きもの多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。
此はちかみのけり。千の古きもの多し。此はちかみのけり。
千の古きもの多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。
此はちかみのけり。千の古きもの多し。此はちかみのけり。
千の古きもの多し。此はちかみのけり。千の古きもの多し。

ひるはちとて地つらりしを以て名も伝ふるべし
てつらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし
つらりしを以て名も伝ふるべし

つらりしを以て名も伝ふるべし



